

道しるべのはたらき—学会に夢託す

坂 口 順 治
(平安女学院大学)

2002年4月、日本の新しい教育がスタートした。学校五日制の新学習指導要領が完全実施された。多くの問題性を含んでいるが、第3の教育改革は「ゆとり」と「生きる力」を育む生涯学習の理念を基本に行われていることを明記したい。今年はその記念すべき年である。

わが学会は創立以来、頑固な教育界に挑戦し、行政をも動かして現代の生涯学習時代の到来を導いたことに健やかな誇りをもちたい。

明治の教育改革は、和魂洋才、殖産興業、富国強兵の欧化政策であった。昭和の改革は、戦後民主主義の人格陶冶と人間性開発の六三制への転換であった。しかし、経済価値優先、工業振興の人材育成が偏差値偏重教育をもたらした。その反省から第3の改革が生涯学習の理念の下に準備された。

平成の教育改革は、人間性の尊重という抽象的な表現ではなく、利己性と利他性という二元論的カテゴリーを克服した、日常生活の実存的人間の生きざまに迫るものである。人々の関心が所有ではなく、いかに生きるか、自己実現をはかる「存在」の意味を追求する実践教育である。愚直とも思えるほど、生きる原点を志向した教育である。

第3の教育改革は、一方で教育の自由化と多様化に陥り、ゆとりの怠惰と批判されるが、学校教育が生涯学習の一環として展開している事実に関心をもちたい。学校教育は、子どもの生きるエネルギーを大切に、豊かな人間性を育み、主体的能動的な学びの力をつけることである。個性を重視し、他人との交流をふかめ、主体的な能動的な学習の力、豊かな人間性（自然に感動する心、正義感、生命の畏敬、人権の尊重などの基礎的倫理観、共感の心、社会貢献の精神など）を体得する具体的な教育課程が展開されている。

新しい教育は従来の学校教育と比較して著しい相違がある。大雑把に言えば、人生の前半の教育からライフサイクル型の学習へ、先行投資型教育から現在生活者の有効学習へ、強制的詰め込み教育から学習者支援教育へ、他者教育型から自己学習型へ、集団画一型教育から個人適合型学習へ、内容中心教育から過程中心学習へ、教科中心型から生活中心型へ、上意下達型注入教育から相互支援型学習へ、知る教育からわかる学習へ、学歴社会から学習歴社会へ、相対評価から絶対評価へ、総合学習プログラムの展開、週5日制、体験学習など、方法にも大きな転換をなし遂げた。

初代の会長故岡本治氏は、かつて『学校教育に楔をいれて』と強調された。それは画一的な教科内容の一方的教育に楔をいれて、人間が生涯にわたって学んでいく「ラーニング トー ビー」の理念の現実化運動であると理解できた。誰もが、いつでも、どこでも、やる気があれば学習できる生涯学習の普及と浸透を学会の大きな使命であると言われた。

発足以来の学会の歩みはまさしく教育改革に取り組むパイオニアのはたらしきであった。

いつの時代でも教育改革の骨子は、理念的には同じような人間性の育成であるが、その時代の社会思潮や現象によって往々にして本質が歪められ、気付かない内に人間性が葬り去られることが多かった。

今回の改革に馴染まない人たちの批判は、学力の低下、評価の問題等を取り上げて、古い時代の回顧的視点から論評している。しかし、人間教育の根本理念を無視して現象的な操作側面からの批判であれば、本末転倒である。従来型の惰性的教育実践に甘んじてはならないのであり、ここでこそ本学会の活動が「道しるべ」となっていくべきではないだろうか。

例えば、学力低下論に対しては、学力対策には従来の教科内容の学力面だけでなく、意欲向上策や総合学習対策がもりこまれることが必要であり、学力指導カウンセラーなど、従来の上意下達型から学校現場での支援型へ変化している方向を見定めるべきであろう。また、教師自身のあり方もタテ型の教科指導に対して、共同学習的ヨコ型の支援法を身につけるべきであろう。過去志向的ではなく、未来を志向する教育でありたい。

これからの学会活動について私は夢を託したい。

第1は、今までの学会活動を堅持して欲しいことである。理論と実践の統合をはかるユニークな学会であって欲しい。そして、従来通りの学会大会の開催と年報発行が続けられるであろうが、その上に初心忘れずべからずで、学会設立理念にいつも立ち戻って発想していただきたい。

ともすれば従来の社会教育的癖で、どんなやり方をすればよいかという即効的対策に走ってしまう傾向があり、本質的思考なくして末梢的対策をとることが多かった。それをなくしたい。「Whyに徹すればHowに通じる」とフランクが言ったが、学会はいつも原点志向を続けることが使命であり、教育界の道しるべになるべきはたらきである。

第2は、学会が主唱して、NPOのような関係団体を創設したい。生涯学習を種々の側面から支援する活動団体である。その主な仕事は、人づくりである。例えば、教育担当者だった企業退職者をリクルートして、学校の総合学習プログラムの活動を支援し、現任教師の再教育をする。また、スクール・メンターのような助育的な、生活指導的役割をもったボランティアの育成をする。人生を語り合い、人格的な接触のできるメンター育成である。さらに、新しいコミュニティの学習活動をコンサルティングできる学習指導者の情報交換の場として用いるのである。その上に、高齢者の社会福祉活動が停滞気味である現状を打破し、高齢者の高齢者による相互学習活動がもっとも優れた社会福祉活動になる実践研究ができるのである。

第3は、ホームページを開くことである。できればサイトをもつことである。学会の活動は年一回の大会や年報や通信だけではない。何時でも、何処でも、誰とでも議論ができる情報交流の場と時とを創りたい。メール・シンポジウムや、ホットな世界の動向を議論し合える機会を増やしたい。そして世界に発信していきたい。

この夢には、根底に生涯学習の人間観がある。人は人と交わることによって成長するという普遍的哲学がある。教師やリーダーが触媒になって全人格の相互成長がある。また、学校・地域という切断的理解、利己利他の二分法的解釈が通用しなくなった現実をにらんで、新しい中間集団（新コミュニティ）の形成に役立つ人づくりに寄与したいからである。